

黒狼侯爵の
蜜なる鳥籠

神矢千璃
SENRI KAMIYA



ノーチエ文庫

登場人物紹介

ロイセル

ブルーベルの父。
誰よりも娘を
愛している。

ルイス

サリアの父。
借金返済に
ブルーベルを利用する。

サリア

ブルーベルの継母。
男爵家の令嬢で
贅沢を好む。

クリス

セレディウム侯爵家の
騎士。
ウォルドとは
兄弟のような仲。

アルテミラ

セレディウム侯爵家に
仕える魔女。
ブルーベルの世話係で
よき話し相手。

ウォルド

セレディウム侯爵家の若き当主。
冷血で残忍と噂され、
こくろう ころしき
黒狼侯爵の異名を持つ。
教会で見たブルーベルに惹かれて
縁談を申しこんだと言うが……？

ブルーベル

継母からの虐待が原因で
実家を離れ、教会で暮らす少女。
幼い頃に愛を誓い合った
おきななじり
幼馴染を思い続けている。
父親思いの心優しい性格

目次

黒狼侯爵の蜜なる鳥籠
くろろうこうしやく

7

書き下ろし番外編
秘密の思い出

369

黒狼侯爵の蜜なる鳥籠

プロローグ

遙か天上に星々が燦然と輝く夜、どこからか狼の遠吠えが風に乘って聞こえた。

広大な平原にそびえ立つのは、堅牢な城壁に囲まれた石造りの古城。見る者を圧倒するほどの威圧感を放つその城は、黒狼の城と呼ばれ人々に恐れられている。

深夜の城の中は、ひっそりと静まり返っていた。

ただ一室を除いて。

その部屋の三叉檜のような燭台の蝟燭には火が灯り、室内を淡く照らしていた。サテンウツドの化粧張りがされた八人掛けのテーブルはとても重厚で、天板を支える台座にはアイリスの花の象嵌が施されている。

そのテーブルの上に、少女が一条纏わぬ姿で仰向けに倒されていた。

長い睫の下に隠れた青の瞳には涙が浮かんでおり、ベリーののように瑞々しい唇は固く結ばれている。光が当たると艶が増すピンクブロードの長い髪はラベンダー色のリボン

で結われ、後れ毛は上気した頬へかかっていた。

少女——ブルーベル・アランハルトは、妖精かと見紛うほどに華麗な容姿をしていた。誰もが感嘆の息を漏らさんばかりの優艶さに、少女特有のあどけなさもあわせ持っている。

しかしながらそのなめらかな肌には、鬱血の跡が赤い花びらのように幾つも散らされていた。細い両脚は大きく割り広げられ、その中心は男の下半身に繋がれている。

「ブルーベル。この私から逃げられると思ったの？ 本当に仕方がない人だね」

恐ろしく整った容貌の男性が、まるで困った子をなだめるかのごとくそう告げた。透き通るような銀髪は動くたびにさらりと揺れ、その奥に風いだ湖面を彷彿とさせる水色の瞳が覗く。口元には見惚れずにはいられないほど美しい笑みを浮かべている。

「んん……っあ、だ……め、うごかないでえ……っ」

彼はテーブルの上にいるブルーベルを、陶然と眺めていた。ブルーベルの両脚の間にある蜜孔を、質量を伴った剛直で無慈悲に貫きながら。

部屋に響くのは、ぐちゅぐちゅと繰り返される淫らな水音。ブルーベルの細い腰は男性の骨ばった手に掴まれ、蜜に塗れた内部を幾度も蹂躪されていた。

彼に触れられた肌が火照り、甘い痺れがブルーベルの理性を奪っていく。

彼は速い動きでブルーベルを攻め立てながら、ちゅつと強く彼女の肌に吸いつく。満
足げに笑む彼と目が合えば、体の奥がきゅんと疼いた。自分の中に感じる彼の熱が、快
感となつて襲いかかる。それがあまりにも強すぎて、気持ちよくて、切ない。

——こんなはずじゃなかったのに。

約一週間前。ブルーベルは縁談相手の黒狼侯爵と呼ばれる人物に会うため、シルヴァ
スタ地方にあるセレディウム侯爵家の城を訪れた。結婚をすることはできないと、断り
を入れるのが目的だった。なぜなら、ブルーベルには幼い頃に永遠の愛を約束しあつた
相手がいるからである。

だが、とある事情で縁談を断ることができず、ブルーベルは目の前にいる男性によつ
て淫楽を与えられるようになってしまった。

ウォルド・セレディウム。

シルヴァスタ地方を治める領主で、侯爵位を持つ人物。そして、幼い頃にブルーベル
が永遠の愛を誓つた相手。ウォルドと、同じファーストネームを持つ男性でもあつた。
しかしブルーベルは、彼が幼い頃に共に誓いを立てた人ではないことを知っていた。

なぜなら、ブルーベルの愛する人は六年前に亡くなっているのだから——

「君は優しい子だから、もう私から逃げないって約束をしてくれるよね？」

「ひゃああ……っ！」

ブルーベルは、逞しい雄志で勢いよく突き上げられ、堪えきれず嬌声を漏らした。彼
女がその声を出すほど彼は喜び、ブルーベルの体へ抽挿を繰り返す。彼に無理やり快感
を与えられ、ブルーベルの体は意思に反して彼を求めるようになってしまった。

ずちゅつずちゅつと響く淫らな水音は、体の芯を痺れさせる。二人の繋がつた場所か
ら聞こえるその音に、ブルーベルは、自分が彼に満たされているのだと思ひ知らされた。
「ご、ごめ……なさ、ゆるし、て……っ。もう、逃げませ……から……っ……やあっ」

彼は、毎晩ブルーベルの部屋を訪れて一緒の寝台で眠る。そして、ブルーベルを両腕
に抱きしめるのだ。それがたまらなく辛くなって、彼が訪れる前に寝台を抜け出した。

しかしながら彼がそれを許すはずもなく、ブルーベルはあつさりと捕まつて空き部屋
に連れこまれた。そのまま寝衣を全て脱がされ、お仕置きと言わんばかりに辱めを受け
る結果となつてしまったのだ。

「良かった、そう言ってもらえて。私としても、君にひどいことはしたくないから」

凶悪な剛直で醜態を何度もこすりあげられる。そのたびにブルーベルは、淫蕩な快楽
を感じて喘いだ。醜態にぐりぐりと彼を押しつけられれば下腹部が震え、体に力が入ら
なくなる。彼はそんなブルーベルの豊満な胸をやわやわと揉み始めた。

「やあ……ああ……っ、ふあ……っ」

乳首が濡れ光っているのは、先ほどまで彼によって執拗に愛撫を受けていたからだ。甘噛みされ、咥えられ、そして焦らすようにしゃぶられたのだ——ねっとりど。

「っ……あ、ふ……っ、く……」

ブルーベルは体の中心を貫かれ、両胸は彼の手の中でいいようにされていた。背筋をびりびりとした快感が走り抜け、どうにも抗えなくなっていく。

繋がっている部分は火傷してしまうのではないかと思うほどに熱く、彼の屹立を呑みこんでいる。

激しい刺激を与えられ、次第に思考を奪われていく。体中にきゅんきゅんと快感が走るものの、素直にそれを表すわけにはいかないと、何とかその甘さに耐えた。

蕩けてしまうほど、気持ちいい。でも私は、彼に堕ちるわけにはいかない——

「ブルーベル。いい子だから口を開けて」

快楽と理性の狭間で葛藤するブルーベルの唇へ、彼は口付ける。強引に唇を割って舌をねじこみ、ブルーベルの咥内を翻弄する。ときに激しく、ときに優しく。

「んんううっ、ふ……ううっ」

くちゆりと舌を味わうように絡められ、刺激された。上顎に舌をこすりつけられれば

妙な感覚が押し寄せ、ブルーベルの膣壁も自然にぎゅっと締まる。

蕩けるほどに口付けは甘く、心まで懐柔されてしまいそうだった。

彼を好きになっては、いけないというのに。

ひとしきり口付けを堪能すると、彼の唇が離れる。二人の口には、つうつと銀色の糸が引いていた。

「……っ、はあ……っ」

乱れた息を整えながら、彼を見つめる。涙で滲む視界に、甘い笑みを浮かべる彼の姿が映った。それだけで、体は再び痺れを感じる。

「ブルーベル。君が見るのは私だけでいい。私だけを感じていればいい」

そう穏やかに声をかけられて、ブルーベルは切なさ胸が苦しくなった。彼に愛を囁かれ、体を求められれば求められるほど、どうすればいいのかわからなくなってしまう。

——私が愛しているのは、幼い頃に約束をしたウオールドだけのに。

どろどろになった膣内への抽挿で、脳が焼き切れるほどの快感を与えられた。あまりの刺激に何も考えられなくなるのが恐ろしくて身を振るが、それを咎めるように腰を打ちつけられる。

「ひあ……っ、んんううっ……、っ！」

がぐと体を揺すられて、涙が頬を伝う。濡れそぼった場所を扶かれ、わけもわからぬままに気分が昂揚していく。

「怖がらなくていい。君は何も案ずることなく、私に身を任せればいいんだ」
ずんつ、とより一層深く繋げられ、強い圧迫感を覚えた。膣内が勝手に蠢き、彼の雄芯を銜えこむ。ブルーベルはたまらず、背中を仰け反らせた。いつの間にか、彼から与えられる快感を求めている自分がいる。

——彼を求めては、いけないのに。

「……やあつ……んんっ……」

体の奥があまりにも熱くて、右手が何かを求めて宙を泳ぐ。すると彼はその手を取り、指同士を絡めるようにして握った。

それとほぼ同時に、ブルーベルは強い波が押し寄せてくるのを感じて、ぎゅつと目を閉じ——

「ああああつ……!」

——絶頂を迎えた。

それなのに、彼はまだブルーベルへ猛った肉芯を穿ち続ける。

「やあつ……、も……っむり……っ」

ふるふると首を振るが、彼の動きはどんどん加速する。

「っはあ……あああ!」

そうしてブルーベルが二度目の絶頂を迎えた後、彼もまた滾った欲望を一気に放出させた。ようやく解放されたブルーベルはびくびくと体を震わせて、テーブルの上でぐったりする。

「動けなくなったの？ 私の寝室に連れて行ってあげるから、心配しなくていいよ」

そうさせた当の本人が、にこりと邪気のない笑みを浮かべて言った。

ブルーベルがこの城から抜け出せるはずもないのに、彼は時おり、まるで失うまいと固守するかのような不安の色を瞳にちらつかせてブルーベルを求める。

今宵も彼の腕に抱きしめられて眠るのだろうと思いつつながら、ブルーベルは意識を手放した。

第一章 運命の出会い

初夏のある日、教会で暮らしていたブルーベル・アランハルトの許へ、父親から手紙が届いた。

『愛しい我が娘、ブルーベルへ。シルヴァスタ地方のセレディウム侯爵家との縁談が決まった。すぐに家へ戻ってくるように。パパより』

手紙を読んだブルーベルは、茫然自失の状態に陥った。というのも、セレディウム侯爵家がどのようなものか、少しばかり知識があったからである。

今から四十年前。当時ただの異民族の長だったセレディウム家は、隣国ノウスリアとの戦争に勝ち、オールドニア王国を窮地から救った。その功績から、国王より侯爵の位を授かったのだ。以後、セレディウム家はオールドニア王国の北端であるシルヴァスタ地方の領主となった。また銀地に黒狼の紋章を持っていることから、黒狼侯爵の異名で呼ばれている。

そんなセレディウム家と、どういう経緯で縁談が決まったのか。

ブルーベルが理由もわからぬままに教会を出たのは、手紙が届いた翌日のことだった。故郷であるミルフィス村へ戻るのは、およそ六年ぶりだ。父の父、つまりブルーベルの祖父は、羊の毛を売って一代で大きな財を築いた。ミルフィスの資産家のほとんどは羊毛で財を築いた者達で、村の外には羊の牧場が広がっている。

村に近づくともブルーベルの実家の牧場が見え、羊達の姿があった。春に毛を刈られたばかりの羊達は、初夏の陽光に包まれながら牧草を食んでいる。

ブルーベルは、昔とあまり変わらないミルフィス村を見て、懐かしさに目を細めた。二年前に父が贈ってくれた茶色のチュニツクに身を包み、荷物も枯葉色の肩掛け鞆のみ。ブルーベルの姿は極めて質素だった。鞆は教会へ預けられたときと同じ物で、中には替えの下着一枚とハーブについて詳しく書かれた本が一冊、そしてラベンダーの匂い袋が入っている。

ふとブルーベルは空を見た。夜明け前に教会を出て、馴染みの修道士に途中まで荷馬車で送ってもらい、その後は街道をひたすら歩いてきた。急いだつもりだが、正午はとつくに過ぎたようだ。

ブルーベルは茅葺き屋根に蜂蜜色の壁を持つ家が建ち並ぶ道を進み、石切り場の前を通り、一番奥にある実家へ到着した。家の前には小川が流れており、二羽の鴨達が悠々

と泳いでいた。庭の林檎の木には薄ピンクの可憐な花が咲き乱れている。地面には丸く白いシロツメクサの花が広がり、小さな蜜蜂が飛んでいた。

そんなのどかな光景をブルーベルが眺めていると、玄関からあわてた様子で人が出てきた。

「ああ、ブルーベル。お帰り。道中、大丈夫だったかい？」

髪のない丸い頭に、野兎のようななこげ茶色の瞳。久方ぶりに会った父ロイセルは、ブルーベルが覚えていた姿よりも少し痩せていた。鼻は小さく、顔はのっぺりとしている。背はブルーベルよりもほんの少しだけ大きく、男性にしてはやや高めの声なこともあり、気弱そうに見える。

「ただいま、パパ。会いたかった」

ブルーベルはロイセルに抱きついた。ロイセルもまた、ブルーベルの背中に腕を回す。「おかえり、ブルーベル。お前には迷惑をかけてばかりで、本当にすまないね」

「ううん、いいの。……サリア様は？」

サリアとは継母のことだ。ロイセルは家を振り返る。

「貴族友達の家へ行くと行って出かけたよ。中へ入ろう。お前も急な帰郷で疲れただろう」
「……うん」

ブルーベルがロイセルと一緒に家の中へ入ると、見知らぬ女性がいて驚いた。床を拭いており、ブルーベル達に気づくと手を止めて目礼する。

「サリア専属のお手伝いさんだよ。サリアは相変わらず、掃除や洗濯を自分でしたがいんだ。男爵家の令嬢として育ったから、そもそもやり方すら知らないし。だから、雇うしかなくて……」

「そう……」

応接室へと通され、ブルーベルは木の椅子へ座った。応接室といっても大したものはなく、テーブルの上に燭台があるだけ。ブルーベルはその様子に違和感を覚えた。ブルーベルの記憶では、応接室には祖父自慢の飾り棚や陶器の置物があった。だが今は、壁に飾り棚の形に日焼けした跡が残っているだけ。そんなブルーベルの疑問を察したロイセルは、彼女の正面に座って溜息をつく。

「久しぶりに我が家へ帰ってきて、さぞ驚いただろう。実は、牧羊がうまくいってなくてね。雇っていた者達に暇を出して、家具もほとんど売り払ったんだ」

「え？」

父からそう打ち明けられて、ブルーベルは絶句した。ロイセルは土気色の顔を俯かせる。「羊毛市場が飽和状態で、多くの牧場が潰れているんだ。それもこれも隣村の領主様が

豪壮な館を建てて、羊毛の取引をしているからなんだけど。うちも煽りを受けて、羊毛が売れなくて」

ブルーベルの顔が青ざめる。実家がそんなことになっているとは知らなかった。最後に教会を訪問してくれた半年前には、仕事が忙しいから教会に来ることができなくなると言っていたからだ。

「ついこの前まで、順調だったじゃない」

「国の方針で羊毛貿易が行われていてね。領主様が管理している羊毛ばかりを取り扱って、私達のような庶民の羊毛は買ってくれなくなっているんだ。どうも隣村の領主様は、自分の羊毛を優先的に買うなら安くするから他の羊毛を買わないでほしい、とお願いまでしているみたいで。うちもサリアが散財をしなければ、何とかやっていけるのだけれどね。あの人は言うことをきかないから」

男爵家の令嬢、サリア。彼女は父親の命令でロイセルと結婚させられた。ミルフィス村はサリアの父であるルイス・コルトナーが管理しており、当時村で最も裕福だったため、ロイセルが彼女の相手選ばれた。亡き妻と娘を愛するロイセルは結婚を断りたかったが、如何せん相手が悪かった。コルトナー男爵は、国王主催の騎馬戦にて常勝無敗の戦歴を誇る騎士。男爵の爵位を国王より賜った後は騎馬戦に出ることもなくなったが、そ

んな彼に逆らえる者などいるわけもない。

このようにして、ロイセルとサリアの結婚は決まってしまった。

「相談してくれたら、パパの手伝いをしたのに」

「ありがとう。お前の手伝いが必要なときはちゃんと言うから、心配しなくても大丈夫だよ」

ロイセルはそう言うものの、たった一人で羊達の世話をするのは大変なことである。ブルーベルはロイセルが教会を訪れなくなった経緯を知って、どうして気づけなかったのかと悔やんだ。

「ごめんなさい、パパ」

「パパは平気だから、そんな落ちこんだ顔をしないで。私のことよりも、お前のほうが大変だ」

「セレディウム侯爵家との縁談？」

「そう。実は私も知らなかったんだ。突然サリアの父親が来て、縁談がまとまったと言いついて。おそらく牧羊の経営悪化を心配して、サリアが何か言ったんじゃないかと思うんだけど」

ただの庶民であるロイセルは、男爵家に逆らえない。彼がサリアと再婚をしたのも、

結婚しなければあらゆる手段を用いて牧場と家を没収する、と男爵に脅されたからだ。ロイセルに選択権がないことは、ブルーベルもよくわかっていた。

「パパが何かしたわけではないのね？」

「ああ。私には侯爵家との繋がりがないからね。侯爵家の当主様との結婚なんて、とてもとて」

侯爵家の当主様。ブルーベルは思わず椅子から落ちそうになってしまった。

「え。ちょっと待って。侯爵家の当主様、つてことは、侯爵様と私の縁談話なの？」
信じられない話だった。だが、ロイセルは大きく頷く。

「パパも嘘だと思ったんだけどね。セレディウム侯爵様から直々に手紙が届いたんだよ。ブルーベルと結婚がしたい、つて。ほら、これ」

ロイセルが懐から取り出したのは、ベージュ色の封筒だった。赤い封蝋にはセレディウム侯爵家のものとみられる狼の紋章が押されている。

「何かあるんじゃないの？ ほら。昔から言うじゃない。うまい話には裏があるつて」

「こんな片田舎の土地や家を奪ってどうするの。うちの財産といえばお前と羊ぐらいなの」

祖父の代で得た食器セットや絵画、家具なども財産としてあったはずだが、それらが

どうなったかを想像して、ブルーベルは質問をやめた。

「お前には悪いと思ったのだけれど、パパもどうすることもできないんだ。辛いとは思えけれど、シルヴァスタへ行ってくれるかい？ 迎えの方は明日来るそうだから」

「あ、明日？ 随分と急なのね」

「うん。……ブルーベル、ごめんよ。パパが不甲斐ないせいで、苦勞をかけてばかりでブルーベルはロイセルの手に両手を重ねた。そして首を振って笑みを浮かべる。

「パパ、私は大丈夫よ。私が強いことは知っているでしょう？」

目の前にいる心優しい父親を、ブルーベルは一度として恨んだことはなかった。ブルーベルを心から愛してくれる、唯一の肉親なのだから。

「お前は本当に、お母さんそっくりだね。顔もそっくりだし、強くて優しい性格もそっくりだ」

「それはそうと、パパ。セレディウム侯爵家の当主といえど、私よりかなり年上のおじさんだったわよね？ 確か五十歳ぐらいの」

「うん。それぐらいだったと思う。お前が今十七歳だから、三十三歳以上は離れているね」
前掛けで顔を覆って泣き崩れるロイセル。ブルーベルはそんな父を慰めた。自分は大丈夫だと。

その夜、ブルーベルは客室で休むことになった。サリアに自室を片付けられてしまい、居場所がなかったのだ。ブルーベルが教会に預けられたのは、六年半前。それからは常に、最愛の人のためだけに祈りを捧げてきた。身勝手な私欲のために神に祈っているからだろうか。十八歳を迎えたら修道女の道を歩みたいという願いを口にしたとき、神父様には渋い顔で首を横に振られた。

「縁談なんて、嫌よ……。私には、ウォルドしかないのに……」

心から愛している人は、たった一人だけ。彼を想うだけで切なく、涙が溢れてくる。彼がもうこの世のどこにもいないなど、未だに信じられない。

ブルーベルは目から零れ落ちた涙を手の甲で拭うと、月明かりが差しこむ窓際の寝台へ寝転んだ。そして幼い頃に思いを馳せる。何よりも大切にしてきた、色褪せることのない記憶に――

ブルーベルが五歳のとき、父が男爵家の令嬢と再婚することとなり、彼女は亡き母の実家へ預けられた。祖父はいなかったが、祖母には様々なことを教わった。刺繍や料理、文字の読み方、薬草について。大抵の家に窯はなく、領主邸の石窯まで出向いてお金を

払ってパンを焼かせてもらう。だが祖母の家には石窯があった。その上祖母は庶民にしては珍しく、文字の読み書きもできた。どうして祖母は何でもできるのか、ブルーベルは質問したことがある。すると彼女はこう答えた。

「ブルーベル。私はね、魔女なのよ。だから薬草やいろいろなことに詳しいの」

その言葉通り、祖母は薬草についての様々な知識が書かれた本を持っていた。それは手書きの、世界で一冊しかない本。

「じゃあ、お婆ちゃん魔法が使えるの？ 魔女って魔法が使えるんでしょう？」

祖母はそんな問いに朗らかに笑いながら頷いた。

「ブルーベルが大きくならたら、魔法の使い方を教えてあげるわね。……そうだ。ブルーベルはいい子だから、魔法の証である魔法の指輪をあげましょう。これよ」

祖母の左手の薬指には、ローズゴールド色の指輪がはめられていた。祖母はそれを指から抜くと、革の紐に通してブルーベルの首へぶら下げてくれる。

「魔法の証？」

指輪の内側には薔薇の花が彫られていた。

「そう、魔法の証。大切なものだから、誰にも見せてはダメよ」

「うん。わかった」

とても綺麗な指輪だった。ブルーベルは祖母の宝物を貰ったのだと子供ながらに悟り、服の下へ隠すようにして身につけた。祖母の孫であることを誇らしく思いながら。

その後、祖母が亡くなるまでの四年間、ブルーベルは祖母と二人で暮らした。

祖母の葬儀の後、ブルーベルは実家へ戻ってきた。懐かしい我が家。だがその思いはすぐに消えた。亡き母の家財はみんな処分され、代わりに彫金の飾りがついたチェストやテーブルが置かれていたのだ。食器類も全て替えられ、専属の料理人までいた。それはさも貴族の暮らしのように。そして食事のとき、ブルーベルは父達と同席が許されなかった。

そんな異様な生活の中、最も困ったのはサリアの性格だ。散財するだけでなく、家中では度々ヒステリックに叫ぶ。ひどいときは物を投げつけたり、家具を倒したり。これにはロイセルも困り果て、そういうときはいつも決まってブルーベルを家の外へ逃がした。

——そう。春の終わりが近かったあの日も、ブルーベルは一人で外を歩いていた。

ミルフィスの村で生まれたブルーベルだが、長年祖母の家で暮らしていたため、村に友達と呼べる子供はおらず、いつも一人だった。暇をもてあまして村の東端までやってきたとき、その豪華な屋敷が目にとまった。

檜のような黒い鉄柵に囲まれ、蔦が青々と生い茂った外壁が目隠しとなっている。二階建ての建物は煉瓦造りで、青い三角形の屋根の煙突には小鳥達がとまっていた。広そうな屋敷の庭には幾つかの木々も植えられていて、二階の高さまで伸びている。唯一残念だったのは曇り空であること。晴れていれば、屋敷はもっと素敵に見えただろうに。

「こんな家、あったんだ」

ブルーベルは黒い鉄柵の周りを歩いてみた。蜂蜜色の家が多い中、その家はかなり異質だった。一体どんな人が住んでいるのだろう。ブルーベルが裏門まで回ったとき、黒い門がわずかに開いていることに気がついた。屋敷の住人が閉め忘れてしまったのか、それともわざと少しだけ開けているのか。どちらにせよ門のそばに人がいる気配はない。ブルーベルは子供ならではの好奇心で、駄目だと思いつつも門の奥を覗いてみた。するとその先には、薔薇の蔓で作られたアーチが続いていた。青々とした葉のところに、紅色の薔薇が幾つもついている。

「……わあ」

思わず門の中へ入ってしまった。これまで植物のアーチを見たことがなかったブルーベルは、うっとりしてしまふ。そのまま吸いこまれるように石畳の上をゆっくり進むと、分かれ道になっていた。少し迷った後、ブルーベルは右に曲がった。すると薔薇のアー

チはすぐに終わり、春の花々が咲き匂う庭園へと到着する。色とりどりの花壇の先に、青い花がさざ波のごとく揺れる場所があった。奥には背の高い木があり、その隣には六本の白い石柱に支えられた東屋^{あずまや}がある。その真下には石造りの長椅子が置かれ、座り心地のよさそうなクッションが敷かれていた。

そこでブルーベルは、立ち止まって息を呑んだ。

なぜならその長椅子に、まるで天より舞い降りてきたかのように美しい少年が座り、本を読んでいたからだ。彼の脚の上には朱色のひざ掛けがかけられ、さらりとした銀色の髪は色白の肌にとても映えた。形の良いすっとした鼻、長い睫^{まつげ}と澄んだ水色の瞳。彼の羽織^はった濃い青の長衣の縁^{ふち}には、金糸で細かく刺繍^{しゅう}がされている。ゆるやかな風が吹いて少年の髪がかすかに揺れ、まるでそこだけが別世界のよう。

見惚^{みと}れていると、ブルーベルの気配に気づいたのか少年がゆつくりと顔を上げた。そしてこちらを見て目を丸くする。ブルーベルはそんな表情にさえ、神聖さを感じずにはいられなかった。

「あなたは天使様？」

ブルーベルの問いかけに、少年はさらに驚いた顔をした。少女の質問があまりにも意外だというように。



「それは君のほうだよ。君が天使様なんじゃないのかい？ 体に光を纏まとっているし」
光と聞いて、ブルーベルは首を傾かげた。雲から差しこんだ日差しが、ブルーベルを照らしていたのだ。少年の目には、うつすらとピンクを帯おびた彼女の金髪がきらきらと光り輝いて映った。ブルーベルの愛くるしい表情が、彼女の魅力を一層引き立てる。

「いいえ、私は天使様なんかじゃないわ。ブルーベルっていうの」
その言葉に、少年は心弾むような笑えみを見せた。

「そうか。じゃあ、君は天使様ではなくて妖精だったんだね」

「妖精？」

「ブルーベルは妖精の花と言われているから。そこに咲いている花達がそうだよ」

少年の言葉に、ブルーベルは風に揺れる青い花へ目を落とした。地面から伸びた緑の茎くもは先端でぐるんと丸まって地面へ垂たれ、青い筒状の花が十数個ついて風に揺れている。

「このお花、ブルーベルっていうの？ 私と同じ名前なのね」

ブルーベルは嬉しくなって地面へ屈かがみ、青い花に顔を近づけた。匂いを嗅かいでみると、甘い芳香ほうこうが鼻腔びこうをくすぐる。少年は本を長椅子に置いて彼女のすぐそばに屈かがみ、顔を覗のぞきこんだ。

「君はやっぱりブルーベルの妖精なんだね。瞳の色がブルーベルの花と同じだ」

ブルーベルは頬を赤らめた。

「ち、違うわ」

「そう？ 違うようには見えないけれど」

少年はブルーベルの髪に指を絡めた。さらりとしたブルーベルの髪は柔らかく、一切癖がない。

「あなたは、なんていうお名前なの？」

「僕はウォルド。この屋敷に住んでる」

「一人で？」

ウォルドは肩を竦すくめた。

「まさか。執事や使用人もいるし、料理人もいるよ」

「パパやママは一緒じゃないの？」

「お母様は僕が産まれて間もなく亡くなったから、いないんだ。お父様はここから遠い場所に住んでいて、めったに会えない」

「どうして離れて暮らしているの？」

「僕の体が弱いせいなんだ。元々住んでいた場所は、ここよりも寒い場所にあってね。だからこの暖かなミルフィスの村で療養しているんだよ」

ブルーベルは少年と自分の境遇を少し重ねてしまった。そして思わず、彼の頭を撫でる。「偉いね。私も最近までパパと離れて暮らしていたから、会えなくて寂しい気持ちになるわ」

ウォルドはブルーベルをとっても興味深そうに見つめた。まるで新種の花を見つけたかのように。

「ブルーベルはどうして、お父様と離れて暮らしていたの？」

ブルーベルはウォルドの頭から手を下ろした。

「パパが男爵家の人と再婚して、お婆ちゃんの家に預けられていたの。でもお婆ちゃんがこの前亡くなって、それからはパパと暮らしているの」

ウォルドは、ああ、と頷いてみせた。

「君の家は、アランハルト家なのか」

「知っているの？」

「うん。使用人達の間で噂になっていたから。男爵家の娘と羊飼いの男性が結婚した、って」

あまりいい噂ではないのだろうと、ブルーベルにはわかってしまった。

「そう……」

「でも、どうして結婚できたの？ 君の家がいくらお金持ちでも、貴族と結婚だなんて普通は考えられないことなのに」

オルドニア王国では、爵位や貴族の血が重視されている。そのため、貴族と庶民の結婚は通常ならばありえない。

「父方のひいお爺ちゃんが、男爵の爵位を持っていたの。私のお爺ちゃんは末っ子だったから、爵位は得られずに庶民だったんだけど」

「なるほど。庶民だけれど、一応貴族の血筋ではあるのか。だから、男爵家と結婚できたんだね。おかしいな、って思っていたんだ。貴族と庶民の結婚なんて、普通は認められないのに」

男爵家と結婚できた。その言葉にブルーベルは複雑な顔をするしかなかった。男爵家と結婚して何か利益があったかと訊かれれば、何もない。

「パパ、可哀想なの。赤茶色のくりくりした髪の毛がはえていたのに、頭の後ろに幾つも丸いハゲができて。サリア様と結婚する前まで、そんなハゲはなかったのに」

「サリア様？ 継母のこと？」

「うん。お母さんって呼んだら、嫌がられたの。だから、サリア様って呼んでる。……今日もね。サリア様が突然怒り出したから、パパがお外で遊んできなさいって言ったの」

「ええ？」

ウォルドは心から驚いているようだった。その様子に、ブルーベルは家の話はしない方がいいと察し、話を変える。

「そういえば、ウォルドは何歳？ 私、九歳」

「一緒だ。僕も九歳だよ」

ブルーベルが立ち上がり、ウォルドもつられる。すると、ブルーベルはあることに気がついた。

「あ。身長は私のほうが高いね」

ウォルドはブルーベルよりも目線が低い。ブルーベルが目線を合わせようと少し屈むと、これにウォルドは面白くなさそうにする。

「身長ぐらい、すぐに伸びるよ」

「そう？ 私のパパも背が低いよ？」

「君のパパはそうかもしれないけれど、僕まで一緒にしないでくれ」

「ごめんなさい」

ブルーベルは笑顔で謝った。それがなんとも心をほぐすような笑みで、ウォルドはかすかに頬を赤らめて悔しそうに言う。

「君は狡いね。そんなに可愛い笑顔で謝られたら、怒れないじゃないか。……それはそうと、どうやってこの屋敷へ入ってきたの？」

「門が開いていたから、つい入ってしまったの。ダメだってわかってたけれど、たくさんのお花を見ているうちに楽しくなってしまっ……」

ウォルドはしばし考えこんだ。

「その門っていうのは、薔薇のアーチがある場所？」

「うん、多分そう」

「おかしいな。あそこは誰も使っていないはずなのに。使用人達が使っている勝手口は別にあるから、あの門は開かずの門になっていると思うんだけど」

「本当にごめんなさい。もうここへは勝手に入らないって約束する」

ウォルドはブルーベルの右手を握った。

「いいよ、そんな約束をしなくても。庭ならいくらでも見にきてよ。そうだ、お茶を用意させるよ。こっちへおいで。先日ヘザーの蜂蜜を貰ったんだ。とてもおいしいから一緒に食べようよ」

「え？ でも」

蜂蜜は高級品だ。そんなものを食べてもいいのだろうか。

ブルーベルは戸惑いつつも屋敷の中へと案内された。中央に黄色の絨毯が敷かれた廊下は、柱ごとに天使の像が並べられている。白い天井には水仙の花や葉、蔓が緻密に彫刻されていて、とても美しかった。そうして二人が廊下を進み螺旋階段の前へ来たとき、白いシャツの上からベージュの胴衣を着た中年の男性が現れた。短い銀髪に整えられた口髭、瞳は淡い水色をしている。

「ウォルド様、お客様ですか？」

ウォルドは男性を見て頷いた。

「ハンス。お茶とお菓子を用意してくれないか。僕の部屋へ持ってきてほしいんだ」

ハンスと呼ばれた男性は、気のよさそうな顔をしていた。

「かしこまりました。すぐにお持ちします」

ブルーベルはウォルドに手を引かれて、螺旋階段を通り過ぎてすぐ手前の部屋へ入った。そこはブルーベルの部屋より遥かに広く、机や椅子、チェスト、大きな暖炉があった。青く塗られた天井には星や月、太陽が描かれ、天使達が雲の上に座っている。

「ここが、ウォルドのお部屋？」

「そうだよ」

ウォルドは頷くと、ブルーベルを椅子まで導く。

「すぐく素敵なお部屋。私もこんなお部屋に住んでみたいなあ」

衝立の奥には寝台があるようだった。ブルーベルがテーブルに手を置くと表面に指紋がついてしまい、あわてて服の袖で拭く。ウォルドはそれを見て楽しそうに笑った。

「拭わなくていいよ。そんなのいちいち気にしていたら、晩餐会にだって参加できない」

「晩餐会？ 行ったことがあるの？」

「まさか。まだ子供だから参加できないよ。それに病弱だから大人になるまで生きられるかどうか……」

その言葉に、ブルーベルの表情が曇った。庭園で見たときは思わなかったのだが、ウォルドは服の上からでもわかるほどに痩身で、肌は病的に白い。

「そんなに、体が弱いのか？」

「うん。結構頻繁に熱が出る。今日は体調がよかったから庭園で本を読んでいたのだけだよ」

「じゃあ、外で歩くことはできないの？」

「そうだね。……体力がなさすぎて格好悪いよね。男なのに」

茶化したように言うウォルドに、ブルーベルは真顔で首を横に振った。

「仕方がないわ。病気だもの。格好悪いだなんて思ったりしない」

ウォールドも真顔になる。

「君は……、いい子なんだね。そんなふうに言ってくれたのは君だけだよ。お父様からは精神が軟弱だからだっけいつも言われる」

「ウォールドのババは、とても厳しいのね」

「うん。でも、もう慣れたよ」

ブルーベルはウォールドの両手を、自らの手で包みこんだ。

「そういうのは、慣れなくていいのよ。私のお婆ちゃんが言ってた。そういうことに慣れる必要はないの。寂しい気持ちや辛いという気持ちは、あって当然なんだから」

ウォールドは捕らわれたように、ブルーベルの紺碧の瞳から目を逸らせなかった。ブルーベルもウォールドの視線をしつかり受け止めて、安心させるかのように頷く。

「ありがとう、ブルーベル。君と出会えた今日を、神様に感謝するよ」

「私もよ」

ウォールドはブルーベルの言葉に、少し照れくさそうに笑う。ブルーベルは彼の頬が林檎の实のようで、愛らしいと思った。

と、そこへ銀のティーポットと赤い花模様のついた白い陶器のティーカップ、お菓子を銀のトレイに載せた男性がやってきた。先ほど螺旋階段で会った彼である。ブルーベ

ルはウォールドの手を離してきちんと座り、ウォールドも背筋を伸ばしてその人を紹介した。

「僕の身の周りの世話をしてくれているハンスだ」

歳は五十半ばぐらいに見えた。目元に刻まれた皺は温厚そうだが、太い眉は凛々しくも見える。

「先ほどはご挨拶できず、申し訳ありません。ウォールド様にお仕えるハンスと申します」
丁寧^{あいさつ}に謝られて、ブルーベルは畏縮した。

「いいえ、私もさつきは挨拶できずにごめんなさい。私はブルーベル・アランハルトです」
彼は微笑^{はえ}むと、テーブルの上へ小さなソーサーとティーカップを置いた。次にティーポットを手にすると、優雅な動作でお茶を注ぐ。ティーカップには淡い黄色の水面が波打ち、林檎に似た香りが広がった。その香りは、ブルーベルもよく知るカモミール。ハンスは大きな皿に盛られた菓子と蜂蜜が入った瓶を置くと、そのまま一礼して部屋を出ていった。

ウォールドは蜂蜜の瓶を手にすると、スプーンで掬^{すく}ってブルーベルのティーカップへ入れる。

「んっ！ もったいない、蜂蜜っ。高価なのに」

「遠慮しないで、お客様なんだから。この蜂蜜は僕も毎日食べているんだけど、とても

おいしいよ。ほら、口を開けてごらん」

「え？」

ブルーベルはためらいがちに口を開けた。ウォルドは蜂蜜はちみつを載せたスプーンをブルーベルの口の中へ差し入れて、食べさせる。

「どう？ おいしいだろう？」

「う、うん。甘くておいしい！」

ウォルドは幸せそうに、ブルーベルの笑顔ながを眺めた。

—— 幸せだった記憶を思い返しているうちに、ブルーベルは眠りに落ちていた。彼を夢に見て迎えた翌朝。ブルーベルはミルフィス村の実家で支度をしていた。セレディアム侯爵家の当主に会うために、シルヴァスタへ行かなければならない。

「パパ。おはよう。……どうしたの？」

客室を訪れたロイセルの目の下には隈くまがあり、ブルーベルは父が眠れなかったことを察して心が痛んだ。幼い頃にサリアと父と三人での食事が許されなかったのは、サリアの暴言から自分を守るためなのだと知っている。ロイセルは心の優しい父親だ。

「ブルーベル。今から家を引っ越そう。男爵家に土地を没収されて牧羊が続けられなく

なっても、お前が無事ならそれでいいんだ。だから、セレディウム侯爵との縁談は断りなさい」

「え？」

予期せぬ言葉にブルーベルは耳を疑った。ロイセルは覚悟が決まったとばかりに大きく頷く。

「私はこれ以上、父親としてお前に恥ずかしい姿を見せたくないんだ。これまで苦勞をかけてしまった分、お前には幸せになってほしい。だからセレディウム侯爵なんかと、絶対に結婚をしてはダメだ。私も人の噂うわさでしか知らないけれど、恐ろしい話しか聞かないし」

「恐ろしい話って？」

噂で判断したくないブルーベルだが、向かう先の情報が欲しくて聞き返した。

「シルヴァスタ地方に住んでいる者達は閉鎖的で、同じ部族以外の者には容赦ようしゃがないらしいんだ。とっても冷血で残忍で、逆らう者は即刻殺すらしい」

「パパ。それって、私に死ぬと言っているのと同じよ」

そう、ロイセルは縁談を断りなさいと言ったのだ。縁談を断れば逆らったと見なされ、即刻殺されても仕方がない。ロイセルも自分の発言の矛盾にハッと、首を振る。

「ダメ、やつぱり、縁談は断っちゃダメ！ お前が殺されてしまうよ。でもでも、それだとお前がパパより年上のおじさんと結婚することに……。ああっ、一体どうしたらっ」
ロイセルは相当、取り乱していた。ブルーベルは自分がしつかりしなければ、と冷静になる。

「パパ、落ち着いて。あくまで噂だから……。もしセレディウム侯爵様が噂とは違っていい人で、うまく断れそうなら断るわ。でもいいの？ 断って不興を買えば、パパが困るんじゃない？」

ロイセルはブルーベルを安心させるように微笑んだ。

「私のことは大丈夫。私の楽しみはお前が結婚して幸せな家庭を築き、孫の顔を見ることなんだから。それに、自分より年上の男が息子になるなんて考えられなくてね。はい、これ持参金」

ロイセルは持っていた麻袋を両手で差し出した。

「え？ どういうこと？」

「ほら、断るにしてもタダで断れるとは思えないだろう？ だから念のために持っていくなさい」

「ダメよ、それは万が一のために置いておかないと。今、この家は大変なんでしょう？」

「お前のために蓄えた^{たくわ}パパのへそくりだから、いいんだよ」

父親の愛情を感じ、ブルーベルは泣きそうになる。

「……ありがとう、パパ」

ブルーベルはお金を受け取った。そこで家の前から馬の嘶^{いみな}く声がし、ロイセルは動揺する。

「お迎えが来たみたいだ。仕度が済んだら玄関へおいで」

ロイセルは客室を出ていった。ブルーベルは持参金を鞆^{かわばん}に詰めながら考える。おそろくロイセルは、娘の結婚に備えてお金を用意していたのだろう。元々は縁談を断るためのお金ではないはずだ。他にも気がかりがあった。それは、なぜセレディウム侯爵が羊飼いの娘と結婚する気になったのかということ。いくら男爵家と繋がりとあるとはいえ、侯爵家とは身分差がありすぎる。貴賤結婚^{きせんけっこん}、どこの話ではなく、現実的に考えてこの縁談はまずありえない。それに、セレディウム侯爵はシルヴァスタ地方に住むシルヴァスタ人という異民の長^{おき}でもある。どう考えてもこの縁談話は不気味という他ない。

ブルーベルは考えごともそこそこに、ロイセルが用意してくれた服へ着替えた。首元に花柄のレースがあしらわれたミントブルーのチュニック。足首が隠れるほど贅沢^{ぜいたく}に布が使われ、袖口もゆつたりとしていた。小鳥が刺繍^{ししゅう}された長い帯を腰に巻いて、前へ垂^た

らす。長袖なのは、ミルフィス村があるグリンスフィン地方よりシルヴァスタ地方が寒いのを心配して、氣遣つてくれたのだろう。

「相当無理をしてくれたのね……」

家財を売らなければいけないほど家計が火の車だというのに、娘が恥をかかないようにと高価な衣服を揃えてくれる、優しい父。ブルーベルは申し訳ない気持ちでいっぱいだった。

第二章 秘密の約束と賭け

ロイセルに見送られて、ブルーベルはシルヴァスタから来た黒塗りの馬車へ乗った。

外には栗毛の馬に乗った護衛の騎士が三人も付き添い、随分と物々しい。護衛の騎士達は銀の鎧に黄色い飾り房と白い羽根のついた兜をかぶり、完全防備をしている。先頭を行く騎士の持つ白銀の旗には、腰を地に下ろして正面を向いた黒狼の姿が刺繍されていた。ただ一人、馬車にブルーベルと同乗した騎士は、鎧を着ていなかった。首元まで隠れるかつちりとした白い襟に、膝まである上着。衣服は黒主体で、銀の胸当てには狼の浮彫があった。剣の鞘とロングブーツは濃紺で統一され、銀糸の刺繍が入っている。

「あはは。ごめんね、男と同席で。緊張していると思うけれど、楽にしてね」

向かいの席に座っている騎士が、随分と明るい口調で言った。銀髪に水色の瞳で、彫りの深い顔立ち。睫毛も長く、じっとしているだけでもかなりの華やかさがある。外見は二十代前半に見えるものの、落着いた物腰から二十代後半かもしれないと感じた。

「失礼なことを、お訊きしてもいいでしょうか」

「何かな？ 私が答えられることなら、何でも訊いて」

柔和で気さくな彼の口調に、ブルーベルは少しだけ警戒心を解いた。

「えっと、クリス様、でいいでしょうか」

クリス・ブラウン。それが、彼の名前だった。

「クリスで構わないよ。よろしくね、可愛らしい姫君」

クリスはブルーベルの両手を恭しく持ち上げて丁寧に握ると、色香を最大限に發揮して微笑んだ。普通の女性ならば気絶してもおかしくないほどの、破壊力を持つ笑み。

教会暮らしをしていたブルーベルは、男性と接した経験が少ない。それでも、目の前の人物が女性に慣れていることはよくわかった。

「クリス様は銀の髪に水色の目をしていきますけど、それってやつぱり」

「うん、シルヴァスタ人の特徴だよ。シルヴァスタ人はほぼ、銀髪に水色の目をしているんだ」

ブルーベルは心底驚いた。ウォルドも銀髪に水色の目をしていた。彼もシルヴァスタ人だったのだろうか。

「そう、なんですか」

不快にさせないように気遣いながら、ブルーベルはクリスに握られた両手をそっと引

き抜いた。

「君も変わった髪の色をしているね。ピンクブロンドだなんて、めったにいないよ？」

クリスが目をやったのは、光に当たるとピンク色に輝く金色の髪。ブルーベルは自分の髪を見ようとして、髪を一つにまとめて結い上げていたことを思い出す。

「はい。不思議な色ですよ。亡くなった母も同じ髪の色をしていたそうです」

「へえー、そうなの」

他愛のない話をしている間も、馬車は順調に進んでいた。ブルーベルは、実は馬車に乗るのは初めてだった。作物を運ぶための荷馬車には乗ったことがあるが、貴族が乗るような箱形の馬車には一生縁がないと思っていたのだ。サリアやその父である男爵が乗っているのと、ウォルドの屋敷前に馬車が停まっているのを数回見た記憶はある。その頃は、まさかこんな形で自分が馬車に乗ることになるとは夢にも思っていなかった。

ブルーベルが馬車の窓へ目を向けると、白樺の森が広がっていた。クリスも窓の外を眺めて、ほっとしたように小さく息を吐く。

「シルヴァスタへ入ったね」

ブルーベルの故郷であるグリーンズフィン地方には森がない。そのため、シルヴァスタ地方に入ったことは一目瞭然だった。

「綺麗ですね。一面に広がる白に、葉の緑がよく映えて」

「外観はね。でも一歩中に入れば、人を惑わす恐ろしい森だよ」

「どうして、恐ろしいんですか？」

クリスは楽しそうに笑いながら、目線だけを白い森へと向けた。

「森はかなり広くて、似たような景色が続くから。一度迷えば、簡単には森の外へ出られない。だから我々でもめったに入らないんだ。でもあまりに美しいから、年に何人かうっかり入ってしまつて戻らない、つてことがあつてね。……もしもこの白い森を突つ切れば、君の故郷のグリンスフィン地方への近道になるのだけれど、入るのは絶対にやめたほうがいいだろうね」

森が見えなくなると、なだらかな山が見えた。グリンスフィン地方には、小さな丘はあるが山はない。

「あれ、山ですよね？」

「うん、そうだよ。あの山はね、夏の終わり頃になると、まるで上等な織物のように鮮やかな赤紫色に染まるんだよ。ヘザーの花が多いから」

その花の名前を聞いたことがあつた。釣鐘形をした赤紫色の花。

「ヘザーの蜂蜜を口にしたことがあります。お茶に入れて、飲んだんですけど」

「おいしいよね、ヘザーの蜂蜜。でもあの蜂蜜はとても希少だから、普通ではめったに食べられないんだよ。何せ、このシルヴァスタでしか採れないから」

ウォルドのことが頭によぎつた。彼の家で貰つた蜂蜜は、いつもヘザーの蜂蜜だったのだ。

「……そういえば、シルヴァスタはとても寒い場所だと聞いていたので、こんなにも緑が豊かだとは思いませんでした」

正直な感想に、クリスはうんうんと相槌を打った。

「冬はとっても寒いよ。雪も積もるしね。でも、ミルフィスに負けないぐらい自然が溢れていて、綺麗な場所だよ。君も我が主と結婚して住むようになれば、気に入ると思う」セレディாம்侯爵との縁談を丁重に断ろうと思つているブルーベルは、返事ができなかった。とはいえ、果たしてそれは正しい決断なのか。ブルーベルは真剣に迷つていた。実家の牧場経営が厳しいということが、どうしても引つかかる。

セレディாம்侯爵が何を思つてこの縁談を進めたのかは、わからない。だがもしも五十代の男性に慰み者にされるための結婚だとすれば、ブルーベルにとってこの上なくおぞましいことだ。

父には断れそうなら断ると言つたブルーベルだったが、今回の縁談が父にとって有益

なものならば、自分の身は二の次でよかった。どうせ縁談を断ったとしても、教会へ戻るしか選択肢はないのだから。

馬車の窓から見える景観が農地や牧草地に変わった頃、ブルーベルは道の先にある大きな城に気がついた。灰色の城である。正確には灰色の石を築いて造りあげた、要塞のような城。周囲は高い外壁に囲まれており、円錐の形をした黒い屋根の塔が見える。乙女が夢見る深窓の姫君がいそうな純白の城とは趣きを異にする、どこまでも堅牢な建物。「あれが……」

ブルーベルは、今更ながら手が震えてしまった。クリスと話していて知らないうちに緊張は和らいでいたが、急激に現実へと引き戻される。

「あれこそが、我らのシルバーフレイム城。別名黒狼の城だよ」

クリスの説明が、ブルーベルの恐怖を煽る。城の屋根にはシルヴァスタの紋章のついた旗が掲げられ、水が張られた堀が城を囲っている。馬車が堀の前で停止すると、鎖で吊り上げられていた跳ね橋が城門から下ろされた。

「いつも、橋を上げたり下げたりしているんですか？」

ブルーベルの質問にクリスは肩を竦めた。

「まさか。君を安全に迎え入れるため、侵入者を防いでいるんだ。普段は橋を下ろして

いるよ」

馬車が橋を渡り城門をくぐると、再び橋が上げられる。ブルーベルは、ここは監獄か、と目を疑った。これではどう頑張っても、ブルーベル一人で城から出ることはできない。

「随分と、警戒心が強いお方なんです。当主様って」

「そうだね、警戒心は強いよ。気難しいしね。そんな方だから今まで縁談は全て断っていたのだけれど、今回の縁談だけは積極的なんだ」

そこはむしろ気乗りしない方向であってほしい、と声を出しそうだった。

「そうですか」

「あの方は狼のように狡猾で、気に入った獲物は逃がさな……、じゃない、気に入ったものは必ず手に入れる主義なんだよ」

幻聴だろうか。ブルーベルの耳には獲物、という単語が聞こえた気がする。思わず身を竦ませるが、すぐに考え直す。要は、セレディウム侯爵に気に入られなければいいのだ。侯爵の気分を害さない程度に、結婚したい相手ではないと思わせれば、この縁談もなくなるはず。

「必ず手に入れるだなんて、とっても努力家なんです。尊敬します」

クリスはブルーベルの顔を真顔で見つめた。だが、すぐに清々しい笑みを浮かべて言う。